

14. 兵士たちも、彼に尋ねて言った。「私たちはどうすればよいのでしょうか。」ヨハネは言った。「だれからも、力づくで金をゆすったり、無実の者を責めたりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」

説教

イエスさまが宣教を始める前、バプテスマのヨハネが「ヨルダン川のほとりのすべての地方に行って、罪が赦されるための悔い改めのバプテスマ（水の洗い・洗礼のこと）を説」きます(1)。ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰には皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べて荒野で生活しながら、人々に神のことばを教えていました。彼のところに多くの人々が「悔い改めのバプテスマ」を受けにやって来ます。その群衆にヨハネは「悔い改めにふさわしい実を結びなさい」と教えます(7-11)。「先生、私たちはどうすればよいのでしょうか。」と伺いを立てる取税人たちにはヨハネはこう教えます。「決められたもの以上には、何も取り立ててはいけません。」(12-13)そして、同じように、兵士たちもまた「私たちはどうすればよいのでしょうか。」と尋ねます。すると、ヨハネはこう答えるのでした。「だれからも、力づくで金をゆすったり、無実の者を責めたりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」(14)

今、安保法案のことが最大の話題になっていますが、聖書は単に永遠のいのちの救いと個人の道德倫理を教えるのみならず、国家とか軍隊とか戦争についてどう考えたらいいかについても様々な形で教えています。兵隊とヨハネのこの極めて短いやりとりもまたその一つで、16世紀の宗教改革者マルティン・ルターはこの箇所を解説する形で「軍人もまた救われるか」という文書を書いています。

「私たちはどうすればよいのでしょうか。」これを質問した「兵士たち」というのは、ユダヤの王であるヘロデカ、あるいはローマの総督ピラトが雇った、おそらく「傭兵」であったと思われます。「悔い改めよ、悔い改めにふさわしい実を結べ、神の怒りの斧は既に木の根元に置かれ、良い実を結ばぬ木はみな切り倒されて火に投げ込まれる。」ヨハネのメッセージを聞いて、良心ある「兵士たち」は、それなら自分たちはどうすればよいのかとヨハネに質問します。これにヨハネはこう答えるのでした。「だれからも、力づくで金をゆすったり、無実の者を責めたりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」

ヨハネがここで軍人をやめるよう言わなかったことから、ルターはここから警察や軍隊の正当性（俗権の「剣の権能」）を説きました。勿論それは一つの事実として大切な真理です。（これについては今回は触れません。）しかし同時に、ここには武力の持つ危うさ、陥りやすい危険性も教えられています。ですから、私たちはよく読み取らなければなりません。すなわち、通常、一般国民には所持することを許されない武器・武力を所持する者が、「力づくで金をゆすったり、無実の者を責めたり」する危険性があるということです。「力づくで金をゆする」という言葉の元々の意味は「徹底的に揺らす」で、そこから「怖がらせる、脅迫して金品を強奪する」をも意味します。

「無実の者を責める」という言葉は「間違っただけで責める、悪意で中傷する」、さらには「強奪する、だまし取る」を意味します。武器、武力を持つことで、自分が相手よりも強くなったように思います。それで気が大きくなって、その武器を使ってみようとしみます。その結果、相手を武力で威嚇して怖がらせ脅迫します。そして、それにより「金品を強奪する」ことが起こるのです。武器がなければそんなことは思いつきもしないのですが、武力を所持することで、相手を圧倒し、金品を強奪するということが起こるのです。ここに、武器あるいは武力の持つ危うさがあります。

勿論、ここでは、軍隊全体のことというよりは一兵士個人のこととしてヨハネが教えているのですが、一兵士のみならず、一国の武力についてもそのまま当てはまります。個人にしても国にしても、武力の持つ危険性は共通しています。相手を威嚇し脅迫することで、相手の権利を強奪する、それが武力です。武力がなければそんなことはできないのですが、武力があることでそれが可能となるのです。かつての日本も、富国強兵策を進めて行ったその結果として行ったのが、結局は隣国への侵略と強奪でした。

「無実の者を責める」すなわち「悪意ある中傷をして騙し取る」というのも同様です。これもまた、武力があり、力があるために、自分が傲慢になった結果として、独善的となり、強い自分の言うことが正しく、弱い相手の言うことは間違っていると「悪意ある中傷」をします。そして、そうすることで、相手のものを「強奪」し「騙し取る」のでした。これは戦争の常套手段で、かつての日本も米国も、戦争を仕掛ける時には、相手国の中傷を流して自分たちの戦争を正当化してから攻撃し始めました。

これもまた強い武力があるからそうするのであって、弱ければそんなことはしません。武力が人を狂わせるのです。勝てば官軍、負ければ賊軍です。強い者が正義となります。何が善で何が悪か、正しく判断して生きるためには神の前に謙遜にへりくだらなければならないのですが、武力が人を狂わせるのです。「無実の者を責めるな」とはヨハネが兵士個人の倫理として教えたものですが、歴史を見ると、奇しくもこれもまた一兵士のみならず一国の武力についても当てはまる真理です。

最後に、バプテスマのヨハネは「自分の給料で満足しなさい。」と兵士たちに教えます。これまでヨハネが教えてきた二つの教え、すなわち脅迫して金品を強奪することも、独善的に悪意ある中傷をして騙し取ることも、結局は自分の給料で満足していないからそうするのであって、自分に与えられているもので満足し感謝しているなら、そんなことをする必要はありません。ここでは、兵士個人の「給料」で満足しろとの教えとしてヨハネは教えているのですが、これもまた兵士個人のみならず、一国のあり方としても、実は有効な教えと言えます。

自分の領土や作物、資源だけでは満足できずに、他の国の利権にも手を伸ばしていくというあり方は、「帝国主義」と言います。「帝国主義」を広辞苑で調べると、こうあります。（広い意味では）「軍事上、経済上、他国または後進の民族を征服して大国家を建設しようとする傾向。」かつての日本（まさに大日本帝国）は、自国だけでは満足できずに、朝鮮半島を征服し、台湾、満州、さらにはモンゴル、中国全土、南洋諸島、遂には東南アジアの石油の利権にまで手を伸ばそうとして、アメリカとの全面戦争となりました。今日では、アメリカが世界中に触手を伸ばしてあちこちで戦争をしています。そして、今また日本も、アメリカ帝国に追従し、さらにはそれに便乗しながら、アメリカのおこぼれにあずかって、自らのプチ（ポチ）帝国を形成しようとしています。憲法を無視して集団的自衛権行使のための安保法案を作ろうとしている「安倍政権は、戦後初めて、大国化を自覚的にめざした政権」（渡辺治氏）です。

「自分の給料で満足しなさい。」この教えは帝国主義の正反対を目指します。個人も国家も、結局は神が与えてくださったものに満足できない人間の欲が罪を犯させます。金欲しさに「力づくで金をゆすり」ます。「無実の者を責める」のです。個人なら欲、国家なら民族エゴとなります。そして、これを実現するための武力が加わると、人の欲も民族エゴもますます増幅します。力が正義となります。人を殺して、自分が豊かになろうとします。こうして、神と人の前に罪を犯すのです。

罪を犯す人間に、それを審判する神の怒りは必ず下るとヨハネは警告します。悔い改めにふさわしい実を結べと教えます。そうでないと、神の燃える怒りの斧で根こそぎ切り倒されて火に投げ込まれると警告します。それで、兵士たちにこう教えるのです。「だれからも、力づくで金をゆすったり、無実の者を責めたりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」

これが「荒野でヨハネに下った」神のことばです。黙っていたらどんどん墮落していく罪人を滅びから救い出す、これはまさにいのちのことばなのです。